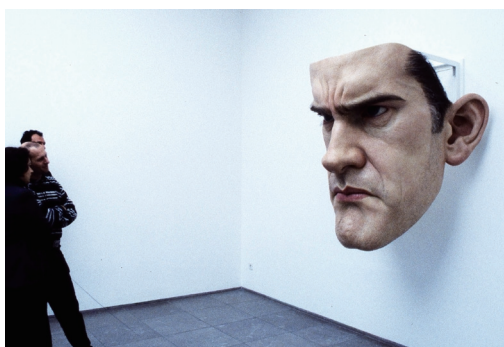


手が頭脳になるとき

小山明 神戸芸術工科大学

Akira Koyama Kobe Design University



上：ロン・ミュエック、「マスク」、1994
 下：ロン・ミュエック、「小舟の男」、2002
 小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男



オリバー・ボーバーク、「通り道」、2000
 小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男

1980年代の虚構と現実の反転もしくは機械の環境化

1 | ロン・ミュエック

ミュエックが作り出すシリコン製のフィギュアの身体は、限りなく人間に近い皮膚の質感を持っている。等身大のものはなく人間より大きいか、あるいは小さいかのどちらかであるが、しかし拡大されても縮小されてもその精度に破綻は生じない。ミュエック自身をモデルにした巨大な顔を見ていると、単に見る側が小さくなったような錯覚にとらわれ、模型とそれを見る者との相対的な位置付けが失われる。すなわち、人間が原型でフィギュアがその投影物である、という関係に決定的な疑問が生じ、どちらが本物かが分からなくなるのである。人間が原型であるという固定概念に基づき、絶対的な優位性に立って行っていた「見る」という行為そのものの主体性が喪失し、それにとまって「現実」という言葉がその意味を失う。

2 | オリバー・ボーバーク

ボーバークの写真は、模型で作られたドイツの街の風景を撮影した写真であるが、われわれに不思議な感覚を呼び起こす。なぜ、このような平凡な風景の模型をつくるのか、なぜ、このようにリアルに風景を再現するのか、そもそもこのような平凡な風景の写真を得るために、リアルな模型をつくり、写真に収めるといふ人為的で複雑なプロセスを経る必要があるのか。このような問いかけを繰り返していると、日常的に見える風景を人為的に作り出す、という複雑なプロセスこそがアートである、というもうひとつの逆転したシナリオがそこに見えてくる。ボーバークが描くものはCGや機械にはできないことばかりなのである。

3 | ジェームズ・グレாம்・バラード

バラードは小説『クラッシュ』（1973年）の第二版序文で、1995年に次のように書いている。

「現代では現実と虚構のバランスが劇的に変わってしまった。その役割は逆転している。われわれの住む世界は、あらゆる種類の虚構



上：ステルス戦略爆撃機 B2、1989



下：イラクへの爆撃の様子をテレビで語る米軍司令官、1991
小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男



グーグルカーとストリートビュー (<http://getnews.jp/archives/471016>)、2013

小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男

に支配されている。われわれは巨大な小説の中に生きている。作家は小説の中で虚構を作り出す必要がなくなってしまう、作家の仕事は現実を作り出すこととなった。また、過去においては自分の外側の世界が現実で、内側の世界は虚構であったが、今ではこの内側の世界に現実を探さざるを得なくなってしまう。」

バラードの表現を借りるならば、ポーバークとミュエックの作品は、まさに現実と虚構の境界に位置しているということができる。正確には、ミュエックが問題にしているのは「解像度」の問題であり、現実と虚構との間の境界線を科学的正確さでもう一度引きなおしているということができるし、一方ポーバークは現実の中だけに存在する言語（模型）を使用して、現実と虚構との関係を語ろうとしていると見ることができる。

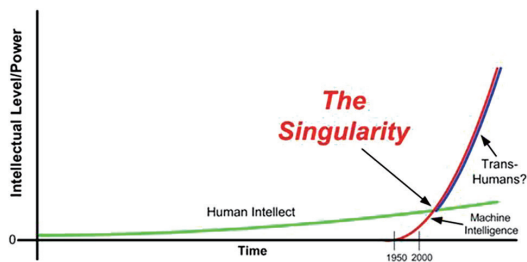
4 | ステルス・インターネット・ストリートビュー

湾岸戦争のとき我々は朝食の時間に毎日、テレビで米軍の司令官がステルス戦略爆撃機がいかに正確にイラクを攻撃しているかという説明をするのを見ていた。司令官の横には大きなテレビモニターが置かれ、そこにはステルス機が見たどこの風景と照準が映し出されていた。アメリカはこのとき世界に対して、アメリカは常に全世界を監視するシステムを所有していることをメディアを通して発信していたのであろうが、我々が驚いたのはそのことよりも、むしろ「我々はテレビを見ているつもりでいたが、そこには我々が映っているかもしれない」ということであった。すなわちここでも「見る」という主体は「見られる」側の客体となり、見ることと見られることはその境界を失っていたのである。この仕組みの生成はインターネットでさらに加速される。グーグルが提供する地図システム「ストリートビュー」では我々が決して行くことのできない地球の裏側の風景を見ることができるが、同時に自分自身を見ていることにもなる。写真はバイクに乗ったストリートビューのユーザーがすれ違うグーグルカーを撮影したものであるが、ストリートビューにはグーグルカーにVサインを送るユーザーの姿が映し出されていた。

モリス、バウハウス、そしてデザイン教育の現在

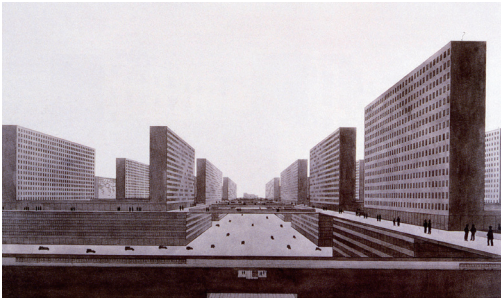
1 | シングュラリティ

レイ・カーツワイルはいわゆる「2045年問題」を提唱している。2045年とは機械「Ai」が自ら思考し、機械「Ai」を作ることができるようになるという歴史上の特異点「シングュラリティ」を指す。コンピュータが人間の能力を飛躍的に超えるその日の出来事はあまりにも爆発的な勢いで起こるゆえに、これまでのシミュレーションがまったく通用しない、予測不能な機械の相互通信の世界がはじまることになる。それゆえに「特異点」として考えるべきである、というのが彼の主張である。



2045年問題（シングュラリティ）の図式 (http://rebaneruminations.typepad.com/rebanes_ruminations/2010/04/singularity-whats-that-wappendix.html)

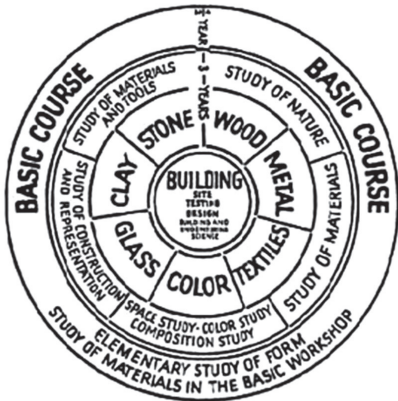
小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男



ヒルバースアイマーの「垂直都市構想」、1927
小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男

しかし、このシンギュラリティは未来の出来事ではなく、1980年代にはすでに始まっており、あるいはある部分ではすでに終わっているのかもしれない。

絵を描き、言葉を使い始めた時から、記憶機能をはじめとして、人間は脳の機能を外化させてきた。手は道具となり、機械となった。マーシャル・マクルーハンはこうした人間の機能の拡張を「メディア」と定義しているが、その「手」の拡張の時代の最長不倒距離を残したのがバウハウスであったことは言うまでもない。パラメータをシンプル化し、モジュール化し、システム化するという道筋が特に後半のバウハウスにおいては著しく達成されていたといえることができる。住宅は「住むための機械」と唱えたル・コルビュジエの「300万人の都市」構想をはるかに超える都市計画理論を作り出したのもヒルバースアイマーであった。彼の都市計画構想は一見平凡な線形住居群のように見えるが、その下には、コンピュータと全く同じバス・システムが走り、住居・商業・交通などの各ゾーンは平面的にはなく垂直にゾーニングされていたのである。

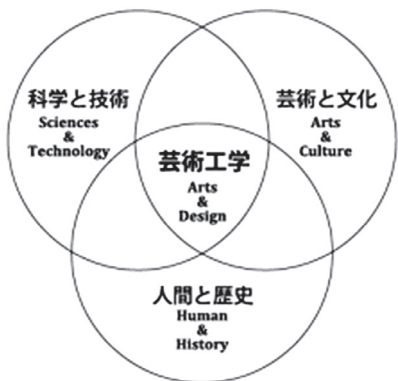


グロピウスが描いたバウハウス基礎教育の図式、1922
小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男

2 | デザイン教育

もしも現在、機械と人間との関係の中にバウハウスを位置付けるならば、モリス、バウハウス、1980年代の機械の環境化、そしてシンギュラリティというパースペクティブのなかでとらえる視点が考えられる。ゆえに現代のデザイン教育もこうした視野の中で位置付けられる。しかし一方では、人間には脳を含めて近代以前の身体・近代の身体・近代以降の身体が時とともに入れ替わるのではなく、重なった層として共存している。このどちらの視点が欠けても現代のデザイン教育は不可能である。

神戸芸術工科大学では、新しい芸術工学の教育プログラムとして20科目から構成される「インタラクショナルデザイン科目群」の提供をおこなっている。



芸術工学の図式、1989
小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男小舟の男

形は異なるがすべてのものがコンピュータとなった今日、すなわちテクノロジーの環境化が進み、機械が水や空気のように環境となった現在、プログラミングは人類の新しい「言語」であり、機械とやり取りすることのできる唯一の手段として存在し、これをすべての演習科目に様々な方法で関連づけていくことは必要不可欠なことであるが、このカリキュラムの核となるのは「考えること」である。これまでにRCAやIAMAS、武蔵野美術大学など他大学と連携しワークショップを行っているのは、「多様な言語で考えること」こそが新しい発想を生み出すことを保証するするものと考えられるからである。また学科をこえて他領域の学生とディスカッションすることからしか、新しい可能性は生まれてこない。

手が頭脳となりつつあるとき、人間にとって手のもつ力、言語のもつ力をふたたびとらえなおさなくてはならない。